関西自然保護機構会誌 27（1）：3－5，2005

生物に関する資格の是非を考える
－シンポジウムの主旨説明－

琵琶湖博物館　布　谷　知　夫

Thougts on the pluses and minuses of nature-related skills certification －A summary of points of view－ . Tomoo Nunotani（*Lake Biwa Museum*）

大きな書店に行くと，実用書などの中に，「資格」というコーナーが作られていることがある。さまざまな資格を取るためのハウツー本がたくさんあり，資格を紹介する本には1000を超える資格が紹介されている。こういう状態を見ると，資格というものが日常的に社会を動かす上で，影響力を持っているらしいことが分かる。また数十の資格を取っているが，その資格を仕事で使うわけではない資格マニアとでも言うような人がかなり居るらしいという話を聞くこともある。

そして近年になって，生物に関する資格がいくつか生まれてきている。森林インストラクター，ネイチャーゲームリーダー，ビオトープ管理士，自然観察指導員，などのような資格である。そして同じような資格は，全国レベルだけではなく，都道府県あるいは市町村でも作られ始めている。

このような生物に関する資格が生まれ始めている理由には，やはり社会的な要請があるということであろう。特に生物に関する資格には，自然環境の保全に関係した資格が多いことが特徴であり，自然環境への関心が高まり，その保護に対しての基準のようなものが必要とされているということだと考えられる。しかし一方でそのような要請があることに対して，資格というものは人を集めるための手段として使われる場合がある。例えば講座などの実施に対して，受講者に対しては資格が与えられることは，人を集めるインパクトは格段に強くなる。大学の単位で，どれだけの資格が取れるかというようなことは，大学の入学者を増やすための大きな要素となっているらしい。

一般的に言って，資格というものが本当に役に立つ場合と，それほど役に立たない場合があると思われる。わざわざ作った資格が役に立たないというのは本来はないはずだが，資格というものは，何らかの基準に従って，誰かが認め，与えてくれるという側面があるために，非常に受身にならざるを得ない部分があるからである。この点は資格について考える上で，最も基本的な点として考えておかなければならない点であると考える。

また資格を大きく分けると，技術を伝えて，ある水準になったことを認める資格と，ある知識が一定以上の量であることを確認する資格，そして，技術や知識を伴いながらも，考え方がある範囲の中にあることを確認する資格などがある。

最も基本と思えるのは技術の質を確認するための資格で，爆発物，危険物，電気，あるいは溶接などの技術あるいは潜水などであり，このタイプの資格は多い。水準以上の技術を持っていないと危険がある場合であり，厳密に資格の審査・試験が行われる。また知識の量を問う資格には，司法

試験や会計士，気象予報士，宅建など，これも数多くあり，仕事をする上で知識の量が問題となるために，これらについても知識量を確認するための試験が行われる。この二つが資格の大部分である。

そしてもう一つは知識，技術を含みながらも考え方が一致した集団を作ろうとするもので，生物に関する資格はそういう側面があると考えられる。あるいは茶道や華道なども，技術だけではなく，そのような側面があるのかもしれない。また広い意味では押し花やダンスなど趣味の各分野の資格もそのような範疇に入るかもしれない。

生物の資格の場合には，最初に述べたように，自然環境をどう考えるのか，ということと，深くかかわった資格とならざるを得ない側面があり，自然環境に対するかかわりを前提とすると，そこには価値観や自然観が問題となる。自然なんて開発してしまえばいい，なくなっても何も困らない，と思っている人にとっては，ビオトープや自然観察などの資格を取ることを考えることはないであろう。

私の個人的な経験からいうと，かつて自然観察に関する資格が作られるという話を聞いて，それに反対をしたことがある。自然の観察は一般に言われるほどには技術でも知識でもなく，本当に大切なのは，皆で自然を見ようとする姿勢であり，その背景には自然を大切にし，できる限りはそのままで後世に残そうという考え方がある。そういう立場を持った上で，知識や技術が付け加われば，より幅の広い自然観察を行うことができるが，前提になる自然に対する思いがなくて技術と知識だけしかないのでは，観察会をしながら，自然を踏み荒らすようなことが起こってしまう。自然を大切にしたいという気持ちを，試験や講義で測ることはできないし，逆にもしそれをしたら，思想誘導であったり，考えが違うものを仲間はずれにするような考え方であろう。資格を作ろうとする者がその考えを広めるために，善意であっても，人の考え方や自然観を評価し，採点するようなことはしてはならないと考えた。資格には，歓迎する人が多い反面，資格にはマイナスの面があることも頭に入れておくことが必要である。

さて，このような基本的な視点を持って，具体的に生物に関する資格というものの是非について考えてみたい。資格というものがプラスになるのは，次のような内容であろう。

1）対象となる分野の社会的な発展につながり，その分野（運動）を広めることにつながる。例えば，ビオトープに関する資格は，ビヲトープの質を担保し，各地にビオトープを作り広げることにつながっていくだろう。

2）資格の中身が公表されることで，その分野が整理され，外部からも分かりやすくなる。資格に関する講座や試験などが準備され，あるいは公表されることで，何をしようとしているのかが外部からも分かりやすくなり，結果として他人にも伝えやすくなる。

3）その分野の勉強をし，その運動に参加していくために個人の勉強の機会となり，また実践するための励みとなる。そして実際にはこの面が資格を考える上では最も大きな側面であると考えられる。資格を取ることを目標にして勉強し，がんばることが個人的な励みとなり，結果としては十分な知識や技術を身につけることにつながっていくということがある。

それに対して，資格というものがマイナスになる場合には次のような点があると考える。

1）行政を含めてどこかの団体が出す資格である以上，その団体の持つ考え方があり，そのフィルターを通る人にしか資格が出されない可能性がある。最初からその考え方を持たな

い人は，その資格を取ることを考えないかもしれない。いずれにしても，広く広めることに対して，逆行する面を持つ。

2）資格を集めている人は意外と多く，資格を作り，準備した側の努力にもかかわらず，資格を取っても，その分野の仕事や活動をしないままで終わるという例は多い。結局は資格というもので人を釣ろうとした結果，そのエサである資格だけを取って逃げてしまう，というのは言いすぎであろうか。

3）資格を出すことで，資格を持たない人を排除することにつながってしまう場合がある。特に生物に関する資格では，考え方の部分が大きいため，資格を持ったもので集ってしまい，考えを広めることについてはそれほど効果がないということが起こりかねない。

4）資格を取ったことで，ある活動に参加することが前提とされ，あるいはグループに参加することが前提とされるために，メンバーが増えても活性化しない，あるいはグループの本来の方針が揺らいでしまう場合がある。

全体として資格についての否定的な面を多く述べたかもしれないが，プラスの面も大きいし，それを否定するつもりはない。資格を目標にして勉強し，活動に参加して，その活動が生きがいになれば，すばらしいことであると思う。ただ生物に関する資格は，自然環境の保全，自然保護ということを避けて通れないものであり，そうである以上，総合的に見て，自然環境の保全，自然保護にとって，役に立つ資格であってほしいと思う。いい資格かどうかの分かれ目は，この点であると考える。

また多くの場合には，資格をとって活動をすることは，いわゆるボランティア活動である。資格を取り，自分が望む活動に楽しく参加するというのは，個人的にはそれでいいかもしれないが，社会的にはそれだけで良いのだろうかという疑問もある。資格を出す側はその資格を使って社会的な活動をすることを期待しているわけであり，本来であれば，生物に関する資格であっても，その資格を使って仕事ができるということがあってもいいのではないかと思う。資格を出す側は，出すだけで後の活動のフォローをまったく何もしないと言うのでは，良くないのではないだろうか。資格を生かすことにつながるような社会的な保障を作り上げていくことのも努力をすることが，資格を出す側にも求められていいのではないかと思う。

今回のシンポジウム「生物の資格の意義と役割」では，実際に資格を作ることに携わった方や資格を持って活動している方などから，具体的に資格を使って活動することの意味や意義などをお聞きして，役に立つ資格であるためには，どういう条件が必要なのか，あるいは資格を生かすためには，どのような活動をすると良いのか，などについて報告をしていただき，役に立つ資格にするための方向について考える機会としたい。